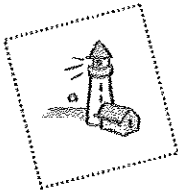


「21世紀に生きる者への教育～環境学習のあり方」(2)



前号では自由が丘の掲げる理念＝人間形成的教育とそれらを先行展開している事例を紹介しながら、環境教育の公教育での位置づけと私たちの実践/農業・地球に生きる科などを記載しました。今回は、主に月寒スクールでの具体取り組み、生徒の反応を述べます。

(4) 農業実習～子ども達の反応1

前号に記載した余市教育福祉村の農業実習・自然体験では、月寒スクールの生徒達から以下の感想がありました。

～生徒による感想～ (写真入でホームページに記載)
「農場は広い！そして虫が…スッカコンゴが生えていて嬉しかった。こんな所に一度住んでみたい！鳥のえさ台をつけて、鳥をおびきよせたい」(中2女子) 「すんぎよ楽しかったよー。また行きたい」(中2女子) 「つぎは3回泊りたい」(小6男子) 「カボチャを植えました。(土に)シートをかぶせたかったです」(中2女子) 「(農作業を指導してくれた福祉村代表) 菊池さんの話は、ちゃんと野菜たちのことを分かってくれてる感じがありました!!」(中卒男子) 「トマトを植えました。ちょっと大変だったけど楽しかった。実がなるのがすごい楽しみ★おいしいのが出来たらいいな～みたいな」(中1女子) 「また行ってみたいです。そして1日泊りたいです」(中2男子)

これは1回目の畑起し＝肥料すき込み・畝作りをして、そこに苗植え・水遣り・支柱たてをとて暑い中で休みなしの労働。分担をしながら、自分の作業が終えた者も残った区画を手伝う。汗をかき土にまみれ鶏糞肥料に触れつつ、でも感想文はその大変さのみに留まらず、「村」の雰囲気や植物に目を配り、野菜の生育・収穫に思いを巡らし、農業者の話に機微を感じたりと子ども達一人ひとりの感受性が発揮されています。(マルチシートはトマト・キュウリ・イチゴにしたがカボチャはしなかったことへのコメント。尚この後はスタッフにより不定期の手入れ/剪定や管理不足…7月キャンプで生徒の二度目実習となる)

感想文以上に、実際に体験・実感したことは沢

山あります。皆の身体の動き、仲間やスタッフへの関り、時々のおかしな遊び行動…何よりも山一つを抱える大きな農場で思いっきり声を出し、その空気・土・木々の自然を全身に受けとめたことは、普段出来ないことを(収穫)しているはず。

そして、月寒スクールにて事前学習した、「北海道の農業」「畑、野菜の知識」「余市地域の紹介」なども下敷きになっています。



◇農業実習「トマトの畝にマルチシートをかける所」

(5) 地域・自然体験～子ども達の反応2

1学期最後は恒例のサマーキャンプ。行事の中でも大きな企画として何度もミーティングを行い目標・スケジュール・食事メニュー・分担・買い物などを進行して7/14に出発(この時は全員遅刻せずに集合)。現地では最初に畑の手入れです。「こんなに成長している!」「まだ食べ頃には早い」「雑草がすごい」と言いながら、午後に海遊びがあるので生徒は一気に草取りへ。前回の経験があるので体の動きも素早いものです。今回の農業実習はここまで(本当は身近な所に施設があれば日常の作業/発見、生産・収穫/喜びとなるのですが…)。

生徒のエネルギーは午後の海水浴、バーベキュー、夜遊び、2日目企画などに移行し、後日の感想文もそちらが大半でした。以下はその抜粋です。

～生徒による感想～ 「面白かったのは海・泳いだり魚やヤドカリを取ったり時間がすぐ過ぎた」「余市村にある木のブランコとハンモックはとっても楽しかった。特にブランコはハイジになった気分」「みんな貴重な役割、やること以上のことしてたと思うよ!!みんなありがとうとおお!!」「翌朝雨で釣りが中止になったけど港から見た海がすごくきれい。

村のさくらんぼを取りにけっこう高い所に登ったが落ちないように必死でした」「海の後、15時バーベキュー準備で16時半に食べ始めた。特においしかったのはヤキトリです」「温泉は3人でサウナに入った。熱かったがめっちゃ気に入った。朝食はいっぱい野菜を食べて美味しかった」「フゴッペ洞窟は石にパエXって書いてあったのは見えた」

これらは、共通した企画・メニューの中にも、各人に固有の視点・感覚・エピソードを感じます。共有する時間と空間から生まれる五感のフル回転から貴重な(財産)を得たのではないのでしょうか。(関連:p6を参照、スタッフも大いに楽しみました)

(6) (自然) 体験・実習から学ぶもの

前号では、「一般的な課題・知識に留まることでは、自発自覚の態度や方向性が明確になりません。出来るだけ生の情報に接する、自ら調べる、多くの体験機会を持つ、仲間との共通理解を図るなどが必須となります。更に身近な大人、特に教師・親がこれをわが身のテーマとして語り実践する人でなくては、生徒への共感はずな中々得られないでしょう…」と書きました。

大人も体験している場に居合わせ、笑い楽しみ役割分担をしながら、スタッフらしい目配りを働かせること、時に一緒に学ぶことが重要です。

勿論、体験は1回で済むことではないし、失敗も付随します。それらを包括する支援者と実践する場・フィールドがどれだけあるか(いるか)です。

加えて、体験的知識を一過性にしないためには、地域の生活や産業を担っている人から、直接に話を聞いたり、交流することも大切です。その人自身の言葉・雰囲気をもたらす響き(影響)や印象(刺激)は、子ども達に強い納得(効果)を導きます。

(7) 環境学習・教育について

一般には自然を知ることや公害・ゴミ問題が租上になり、今日では地球規模の環境・食糧・エネルギーなどが不可欠の分野ですが、いずれも大きなテーマです。それらを具体的に身近な素材にして、共に確かめ納得理解しあうことが教育現場の大事な役割です。自由が丘では、農場実習・地域施設見学・地球に生きる科等の学習を蓄積してきました。その伸張で、この施設に2005年から自然エネルギー「レフトステップ」を導入していきました。

(次号は、その展開、内外の反応、ソーラーパネルを設置した「エコハウス」へのスケールアップなど) (吉野記)



◇食育実習:触る、切る、手順もしっかり…

(付記) :「被災地の子ども達から想起すること、思うこと」

東北大震災は、改めて津波の破壊的パワーと同時に、原発事故の恐ろしさ・放射能(放射線)の脅威を日本と世界に顕在化させました。片や地震後数十分とはいえ瞬間的ダメージとして、後者は「見えない相手」の恐怖であり、中には今後数万年にわたり続く自然界(含人間社会)への対立物となる「敵」としてです。しかもそれを作り出したのは、生き物の頂点に立っているはずの人間社会です(注:人類一般ではなく、実際は権力者の恣意により具現化、核兵器もかり)。

被災地は地域全体が根こそぎとなりました。その復興は、なによりも住民生活とその地場産業の再生を早急に図るものでなければなりません。更に子ども達には大変な現実が続いています。「校庭がない、思い切り遊べない、体育は週1.2時間だけ、学習の時間が足りない、間借りでつらい…」「見通しが立たないのが一番つらい」(小学校教師)状況です。政治も国民も広く連帯をすることが問われます。

ところで、子ども達のこの現実、ほとんどが不登校の生徒にも当てはまる事を感じます(上記下線)。全国各地で、12万人余の児童が、学び成長する機会・権利を保障されていません。フリースクール等の民間施設に通っていても、学校施設とは異なる限られた場所・教育条件の中でヤリクリしているのです。勿論、被災被曝地域を同等にみているわけではないのですが、従来の学校が「なくなった」という点では同じく待たなしの現実です。特に義務教育年齢者の過酷な状況は、いわば大人社会がもたらした「格差・貧困」です。ではどうするのか、やることは何か。

端緒は気付いた人々の行動、其々の条件に応じた持続的実践ですが、抜本的には大きな価値観の転換が求められているのです。(Y記)